

Mr. Bassman (ベースマン列伝) vol.15

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変……。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥くとももの凄い名演・名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えとともに、ジャズ・ベースの素晴らしいさを伝えていきたい。

Milt Hinton 【ミルト・ヒントン】



Copyright, The Milton J. Hinton Photographic Collection.

Profile

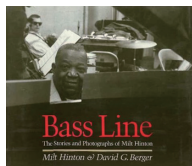
1910年6月23日、米国ミシシッピ州ヴィックスバーグで生まれる。ニックネームは“The Judge (ジャッジ)”。11歳の頃に一家でシカゴに移住。最初にバイオリンを習い始め、その後ベースホーン、チューバ、チェロを学び、最終的にベースを習得。10代の頃からシカゴでフリーランスとして働き、ティニー・パーハムのバンドやエディ・サウスのオーケストラに参加。1936年から15年間キャプ・キャロウェイのバンドに参加し、50年代以降はNYでフリーランスのスタジオ・ミュージシャンとして活動し、ジャズだけでなくポピュラー・ミュージックのレコーディングにも多数参加。その他、TVCMや映画音楽等にも携わるなど、その活動は多岐に渡った。晩年には長年に渡る功績が讃えられ、有名大学から名誉博士号の他、数々の賞を受賞。また、写真家としても有名で、ジャズからポピュラーまで数多くのアーティストたちを写し出し、個展や『Bass Line』『OverTime』等の自身の写真集も発刊した。1992年にはJPA (Jazz Photographer's Association) によって、ジャズ写真の功績を称える国際的な賞として「Milt Hinton Award」が創設される。2000年12月19日にNY市内の病院で息を引き取るまで、精力的に活動を続け、世界中の多くのジャズ・ファンから愛され続けた。享年90歳。

ベーシストとしてだけでなく、写真家としても才能を発揮したジャッジ

《写真家として》

1930年代に友人たちを被写体に写真を撮り始めて以来、ミュージシャンを中心に写真を撮り続けていたジャッジ。ツアー中やレコーディング時の様子から自宅でくつろぐショットなど、気の合う仲間であるジャッジがシャッターを切ったからこそその自然体で表情豊かな貴重な記録に素直に感動させられる。そんなジャッジが撮影したジャズ・ミュージシャンのショットが満載の写真集として、1988年9月に「Temple University Press」から発売された『Bass Line: The Stories and Photographs of Milt Hinton』(右側上参照)、1992年1月に「Pomegranate」から発売された『OverTime: The Jazz Photographs of Milt Hinton』(右側下参照)などが有名だ。

右上 Profile 内でも触れているように、写真家としても大きな功績を残したジャッジを称えて、1992年にJPA (Jazz Photographer's Association) によって「Milt Hinton Award」まで創設された。ちなみに、2005年(第6回)の受賞者は、50年以上にわたってジャズの写真を撮り続けてきた日本人写真家の阿部克自氏(2008年9月17日死去。享年78歳)だった。



Milt Hinton のウェブサイト

ジャッジ関連のウェブサイトとして、長年に渡るジャッジの友人であり弟子でもあるデビット・ジー・バーガーとホリー・マクソンの発案と制作による【<http://www.milthinton.com/home.html>】がある。ジャッジの経歴は勿論、ディスコグラフィからジャッジが撮影した写真、ニュースやイベント関連の詳細までジャッジの業績を知るには最適。また、同サイトは日本語ページ【<http://milthinton.com/jp/index.html>】も存在するので要チェック。ジャッジと今年の5月に亡くなった奥さんのモナ・ヒントンとの仲むつまじいツーショット写真も印象的だ。

With Paul McCartney

意外に知られていないが、ジャッジは元ビートルズのポール・マッカートニーとレコーディングで共演を果たしている。1971年にNYで行われたポールのソロ2作目『Ram』のセッションで録音されたポールのオリジナル曲「Little Woman Love」(2分7秒)でベースを弾いており、ジャッジは自慢のスラップ・ベースを披露している。この曲は結局『Ram』には収録されず、1972年5月にリリースされたシングル「Mary Had A Little Lamb」のB面として発表されたが、後にウィングスのアルバム『Wild Life』のボーナス・トラックとしても収録された。

MH's Great Album

どちらも輸入盤だが、ジャッジの渋いヴォーカルも聴ける『The Basement Tapes』や盟友ジョー・ジョーンズ (ds) とのデュオ作品『Percussion and Bass』などもお薦め！

1955年に録音されたジャッジの魂のベース・プレイが刻まれた名作



ミルト ヒントン ミルト ヒントン

(EMIミュージック・ジャパン: TOCJ-62086)

ミルト・ヒントン (b)、トニー・スコット (cl, bcl)、ディック・カッツ (p)、オシー・ジョンソン (ds)

1. ミーン・トゥ・ミー
2. ビック・アンド・バット
3. 虹の彼方に
4. ミルト・トゥ・ザ・ヒルト
5. ドント・プレイ・ミー (他、全 10 曲)

円熟味を増したジャッジのベースが満喫できるジャッジのベスト盤！



The Judge At His Best Milt Hinton

(Chiaroscuro: 219 [Import])

Milt Hinton (b, vo), Bucky Pizzarelli (g), Zoot Sims, Flip Phillips (ts), Ruby Braff, Kenny Davern (cl), etc.

1. Joshua 2. I Know That You Know
3. Russian Lullaby 4. Deep Night 5. Shine
6. Mona's Feeling Lonely (他、全 18 曲)

晩年のジャッジのいふし銀の名演集



Old Man Time Milt Hinton

(Chiaroscuro: 310 [Import])

Milt Hinton (b), Danny Barker (g, vo), Al Casey (g), Norman Simmons (p), Jimmy Ford (ds), etc

- [Disc-1] 1. Old Man Time 2. Time After Time
3. Sometimes I'm Happy ~ etc.
(他、[Disc-2] の 7 曲含む全 21 曲)

1955 年に「Bethlehem」レーベルで録音され、当時新鋭プロデューサーとして名を馳せていたクリード・ティラーが手掛けた作品で、40 代半ば、ベーシストとして脂の乗り切ったジャッジがベースを立てかけ、腰に手をあてがいがちながらこちらを見据える佇まいが渋いジャケット写真も印象的！「ビック・アンド・バット」「ミルト・トゥ・ザ・ヒルト」「アプスステイアーズ・ウィズ・ミルト」等、ジャッジのオリジナル・ナンバーを含めた 10 曲を収録。ウォーキングからソロまで、存在感抜群のジャッジのベース・プレイが満載！

1973 年から 1979 年と 1989 年から 1995 年の間に「Chiaroscuro」レーベルで録音された音源全 18 曲を集めたジャッジのベスト盤で、ジャッジが亡くなった翌年 2001 年にリリースされた作品。バックー・ピザレリ (g)、ズート・シムズ (ts)、ジェイ・マクシャン (p) 等との共演ナンバーも聴きものだが、ジャッジのベース・ソロによる「Joshua」、ジャッジの必殺技でもあるファンキーなスラップ・ベースがフィーチャーされた「Slap Happy」や「Milt's Rap」も最高！その他、ジャッジのヴォーカルも聴ける楽しい一枚。

本作のタイトル・ナンバーで、ジャッジのヴォーカルをフィーチャーした「Old Man Time」で幕を開ける本作は、2 枚組全 21 曲収録で 1989-90 年に録音された。ライオネル・ハンブトン (vib)、アル・ケイシー (g)、ドク・チータム (tp)、キャブ・キャロウェイ (vo) をはじめ、1930 年代来の旧友たちも参加したジャッジの晩年の名演を記録した豪華な作品。ハイライトの一つであるジョー・ウィリアムス (vo) による「Four or Five Times」の他、ジャッジたちがジャズについて語る「Jazzspeak #1」「Jazzspeak #2」なども興味深い！

MH's Support Album

ジャズ史に輝く数々の名盤で、まさに「いふし銀」と呼ぶにふさわしいほどの渋い名演・名サポートを披露してくれたジャッジ。そのプレイは人柄同様に温かく、そして、深い。



ヘレン・メルリル・ウィズ・クリフォード・ブラウン

ヘレン・メルリル

(ユニバーサル・ミュージック: UCCU-9408)

ヘレン・メルリル (vo) とクリフォード・ブラウン (tp) が手を組み、クインシー・ジョーンズが編曲と指揮を担当したジャズ史に燦然と輝く名盤。1954 年録音。



ミスター・リズム

フレディ・グリーン

(BMG JAPAN: BVJC-37553)

通算 50 年間カウント・ベイシー楽団を支えたギターの名手フレディ・グリーンの唯一のリーダー作品。ジャッジのベースも渋い！ 1955 年録音。



ニューヨーク・N.Y.

ジョージ・ラッセル

(ユニバーサル・ミュージック: UCCU-9587)

NY の情景が目目に浮かぶ才人ジョージ・ラッセルの名作。ジャッジの他、ジョン・コルトラン (ts)、ビル・エヴァンス (p) 等も参加。1958-59 年録音。



春の如く

アイク・ケベック

(EMIミュージック・ジャパン: TOCJ-7066)

ブルーノートのスカウトマンとしても活躍した名テナー奏者アイク・ケベックの人気盤。ジャッジ、フレディ・ローチ (org) の名演も光る。1961 年録音。



トリオ・ジーピー

フランフォード・マルサリス

(ソニーレコード: SICP-1008)

全編ピアノレス・トリオで挑んだフランフォード・マルサリス (sax) の作品。ベースはジャッジとデルバート・フェリックスの 2 人が担当。1988 年録音。



ファースト・ベース

クリスチャン・マクスブライド

(ユニバーサル・ミュージック: UCCU-5332)

クリスチャン・マクスブライド (b) の記念すべき 1st リーダー作。ジャッジ、レイ・ブラウンとベース 3 人だけで共演した「スプランキー」収録。1994 年録音。